



目次

悪霊がもたらした未来	1
大和の世紀末への旅	5
限りなく続く戦い	7
マドゥーの覚醒	10
物の怪が終焉のとき	13
阿修羅島にパピュラス星人が来襲	19
激しい雨	21
韓国女優殺人事件	23
アメリカからやってきた応龍の野暮	26
奥付	
奥付	31

悪霊がもたらした未来

1585年、長久手の戦いが幕を閉じて、徳川家康と織田信雄の同盟軍が天下統一を果たした豊臣秀吉を打ち下した。家康は本能寺の変で倒れた信長の後継者となった秀吉の妹を妻に迎えてた。やがて家康は天皇より中央政権を握った江戸幕府を開いて、征夷大将軍となり、徳川家は十五代将軍まで続いた。幕末の頃に近代社会が始まるとともに廃刀令により、刀を持つ忍者や侍は必要とされなくなった。摂津の国（大阪）の仁徳天皇陵にて、平安時代から生き続けていた後白河天皇（ごしらかわてんのう）の皮を被った雨河童（あまがっぱ）であった。孝明天皇に扮した雨河童は陵墓に埋葬されている仁徳天皇のミイラに向けて、呪文を唱えれば忽（たちま）ち仁徳天皇のミイラは百舌鳥（もず）となって羽ばたいていった。孝明天皇に扮した後で白河天皇は、陵墓に家康から奪った埋蔵金の宝を隠し納めて、悪霊たちを呪文を唱えた封印して崇めた。伊賀の里にて、廃刀令に反した忍者たちを旧幕軍が攻めにやってきた。忍者たちは煙玉を投げ、白煙のこもる中で竹槍が張った仕掛け穴に誘い込んだので、竹槍の餌食となった幕軍兵が数多くいた。山里を下りていけば火縄銃で撃たれるために忍者たちは幕軍兵に火薬玉を投げて爆発させて、それでもくるものは手裏剣を投げて幕軍兵から必死で忍者刀を守った。忍者たちの中で徳川家康に仕えた服部半蔵から授かった相生家の家宝である悪霊祓（ばら）いの斬妖刀（ざんようとう）を持った肩幅がひろいがっちりした相生泰三（そうじょうたいぞう）とその息子の小柄でガタイのいい相生勇（そうじょういさむ）は一緒に大鷹（おおたか）に乗って旅立とうとした。泰三は幕軍兵に火縄銃で撃たれて、勇に斬妖刀を手渡して谷底に落ちていった。勇は父の泰三を置いていく悲しみを背にして旅立った。錦城（大坂城）の屋根瓦に降り立った勇は、十五代目将軍の徳川慶喜（とくがわよしのぶ）に会って廃刀令を廃止するよう申し上げた。慶喜は、「それは孝明天皇に聞け！」と言ったら、呪文を唱えて、次亜空間を起こして蛇女（へびおんな）を呼び出した。蛇女は勇に口から火炎を放って、勇は蛇女に火炎火遁の術で火炎を放って仕返した。勇に襲いかかる蛇女の胴体に斬妖刀を振り回して、斬ったのに硬い蛇皮は斬り裂けないままであった。蛇女は勇の体に巻きついて、締めあげて肋骨を砕こうとした。危うしの勇は極投打（きょくとうだ）の三要素を持った功で締めつける蛇女を解き払った。弱り果てた蛇女の蛇皮のない生首を般若波羅密多（はんにゃはらみった）と刻まれた斬妖刀で斬り裂いて蛇女の頭を落とした。慶喜は烏天狗（からすてんぐ）となり、天守閣から羽を広げて、外へ飛んでいって、勇は口よせの術で大鷹（おおたか）を呼び、大鷹に乗って、烏の頭でくちばしのある黒い羽毛に烏肌の烏天狗を追っていった。烏天狗は追ってくる勇に雨雲を引きよせて集中豪雨を降らして雷を落としていった。

暴れる大鷹に乗っている勇は雷を避けながら、大鷹から琵琶湖に振り落とされた。湖に沈んでいった勇は河童たちに足を取られ、底へ引きずり込まれれいった。昔、災害を起こした大鯨狼（おおなまずおおかみ）が住んでいたが雨河童によって支配された海鱗城（かいりんじょう）へ勇を河童たちはべったりした鼻に鴨（かも）のようなくちばしがある手に水かきがあって背中に甲羅（こうら）を背負って、頭上に金皿を載せた緑色の肌の雨河童のところへ連れていった。人の生き血を吸ってきた雨河童は後白河天皇となり、河童たちは役人となり、勇の斬妖刀を奪おうと、忍者魂をぬき取る儀式を始めた。そこへ大蝦蟇蛙（おおがまがえる）に乗った狐のお面を被った扇色の装束の忍者が現れて、勇の絶体絶命を救った。狐のお面の忍者は、「甲賀盗賊団」と名乗って、「埋蔵金はどこへ隠した？」と言うと、雨河童に棍棒槍（こんぼうやり）を投げ付けた。雨河童は、「仁徳天皇陵の陵墓に隠してある。封印をはずせば悪霊たちが災いを起こす」と言って、棍棒槍を振り飛ばして、渦を起こしてお面の忍者を渦巻きで飲み込んだ。大蝦蟇蛙は雨河童に鼻から毒霧を放って、渦巻きを解き払った。雨河童は大きなひょうたんに乗って、湖の水面へ逃げていった。お面の忍者は大蝦蟇蛙に乗った後で水面から大凧（おおたこ）に乗って、「陵墓の封印を解け！」と言いながら、空中を飛んでいるひょうたんに乗る雨河童を追っていった。寝台の上に縄で括られていって、勇は極投打の三要素を持った功で縄を解き払い、河童たちから奪われた斬妖刀を手にとって河童たちを斬り裂いた。勇は水面まで泳いで上って大鷹を呼び、雨河童を追っていった。琵琶湖を越えた安土山のふもとで雨河童は狐のお面の忍者に嵐を起こしたのでお面の忍者は竜巻に飲まれていった。落下した狐のお面の忍者を見た勇は安土山のふもと周辺に降りていった。山道で倒れている狐のお面の忍者を探し出した勇は、「大丈夫か？」と言って、狐のお面の忍者を目覚めさせた。狐のお面の忍者の壊れた大凧を探しに山を登っていったら幻の安土城が見えた。本能寺の変で明智軍に殺された信長が養子をもっていた秀吉が八幡山城を築城するため安土城を廃城させて焼失したはずであった安土城の本丸で見た信長の孫である秀信が大奥に招かれて以来、小さな雛形の化粧櫓（けしょうやぐら）に佇む愛姫を殺そうとしているのを見てから、勇と狐のお面の忍者は助けにいった。本丸の螺旋階段（らせんかいだん）を上っていけば夜叉たちが攻めにやってきた。目から閃光弾を放った夜叉たちに手裏剣を投げ避けた勇は斬妖刀で斬り裂いて、お面の忍者は棍棒槍で突いていった。勇と狐のお面の忍者が本丸に着くと、秀信は鬼夜叉（おにやしや）となって双鬼の術で2体に分身して、その1体が勇の背後に回って首を絞めつけた。狐のお面の忍者は仮分身の術で5体となって2体の鬼夜叉に攻撃して、勇から解き払って、暴露山（ばくろざん）水遁の術で攻撃した。鬼夜叉は小型水爆弾ほどの威力を受けたにもかかわらずに狐のお面の忍者を2本の角から放った稲妻で突き飛ばして狐のお面の忍者は面が割れて倒れ込んだ。鬼の目がたれ目で口に牙を見せた長い黒髪のハゲの上に2本の角がある赤い肌の鬼夜叉は、「おまえさん何者なの？」と訪ねた。素顔を見せた狐のお面の忍者は、「俺は甲賀盗賊団の新崎渉（しんざきわたる）だ！」と名のった。長髪の渉は立ち上って、「雨河童の隠した埋蔵金の在処を探しにきた」と言った。勇は忍者魂を燃やして、鬼夜叉の1体を火炎風車舞の術で攻撃して火達磨（ひだるま）にした。鬼夜叉のもう1体が勇に呪文をと覚えて、別世界に誘い込むと、勇は自制心を失って、脅いされて倒れ込んだ。愛姫は花簪（はなかんざし）に着物姿の愛姫の成り済まし七変

化（しちへんげ）の術を解き、くノ一の忍者となって鬼夜叉に花ノ舞木遁の術で攻撃して、鬼夜叉の呪いを解いた。勇は別世界からぬけ出した。めめしい鬼夜叉は花枝の毒棘が刺さって、軽く麻痺しながら、「よくも騙したね、私は女が大の苦手なのに」と言って、攻撃しようとした。赤い珠玉（しゅぎょく）に祈り、くノ一の忍者が鳳凰（ほうおう）である火の鳥を呼び出せば別世界へ逃げていった。くノ一の忍者は勇に、「私は伊賀の雛形愛（ひながたあい）と申す。ここに焼失したはずの安土城があるのはおかしいと思って、愛姫に化けて探っていたの」と言って、勇を目覚めさせた。涉はいつの間にかどこかへ消えており、幻の安土城は消え去った。気づくと、勇と愛は草原に寝そべったままでいた。勇は黒頭巾をはずして、髪を後ろに束ねて、覗き穴から目が見えるように巻いていた赤い仮面をはずした朱色の装束の愛に素顔を見せて、「赤い珠玉を持っていただろ!」と言った。愛は、「私は天仙人から授かった」と答えた。勇は緑の翡翠（ひすい）を取り出して、愛の赤い珠玉に合わせた。すると、魂が宿るかのように光り出した。愛は勇に、「天仙人（てんせんじん）の貞明（さだあき）が蛇女の牙から毒液が目に入り、亡くなる前に赤い珠玉を渡されて、緑の翡翠を持っている者がいたなら、おまえの兄である」と告げられたと話した。老師の貞明が師である勇は愛に、「俺にはどこかに妹がいることは知っていた」と言った。勇と愛はたまたま出会っていった烏天狗と雨河童と鬼夜叉の三冠王（さんかんのう）が向かった東の方向をめざして大鷹に乗っていった。人類が生まれる遙か昔にパンドラ大陸が五大陸に分離して高麗（朝鮮）と大和（日本）の間には阿修羅島という地図に載らない島があった。三冠王が蚕蛾（かいこが）を使って、人間となるために孝明天皇は囚われていた本物の孝明天皇は蚕蛾の蛹の絹糸に包み込まれて繭（まゆ）を作り出した。輪廻転生（りんねてんしょう）の準備に入る三冠王は繭の中で、蚕蛾の蛹が孝明天皇の栄養分を吸収して合成を開始するのを見守った。繭の殻を破って蚕蛾と同化した孝明天皇の顔が胸にある蚕蛾人間は羽毛をゆっくりとひろげ飛翔し始めた。三冠王は孝明天皇の高い地位を得るために蚕蛾人間の肉食植物に花粉を雄しべから雌しべに送り出して、胚珠の三身に三冠王のそれぞれ種子内に包まれた。蚕蛾人間は肉食植物の捕虫葉の臭い水に入り、胚珠の三身に包まれた三冠王に栄養分を吸収させた。蚕蛾人間が粘液に溶解したときに種子を落とした胚珠の三身から三冠王はこびりついた粘液を取り除き、物の怪から人間となった。三冠王の烏天狗は烏田崇（からすだたかし）と雨河童は河村薫（かわむらかおる）と鬼夜叉は鬼頭徹（おにととおる）として、名を変えて生きることにした。上空で大鷹に乗って、三冠王の足跡を追っていた勇と愛は海の上を進む幽霊船（ゆうれいせん）にいる骸（むくろ）の海賊たちが弓矢を放ってきて、斬妖刀を振って避けた。今度は海から海坊主（うみぼうず）が現れて、大鷹に乗った勇と愛をつかんで丸呑みしようとしたが、勇と愛を乗せた大鷹は海坊主の周辺を回り回りして海坊主は目をくらませた。海を進んでいくと、朦朧（もうろう）とした険しい島が見えてきて、胸騒ぎがした勇は、「ここが地図に載らない物の怪が住む悪霊島かも知れない」と言って、勇と愛を乗せた大鷹に阿修羅島へ降りよう命じた。勇と愛は荒れ果てたおぼろげで人の気配がない鬼木村と書かれた看板からろうそくに火がついたちょうちんがぶら下がっている廃墟のぼろ屋が建ち並んだ街を不気味に思いながら進んでいった。おぼつかない山を見て、寺院があるのを知った勇と愛がそこへ向かっていくと、山道に夜行性で目の光った凶暴な麝香猫（じゃこうねこ）

の大群が押しよせてきた。勇と愛は嘔みつこうとする麝香猫の群れを振り飛ばして、まわり付いてくる麝香猫を振り払い直して進んだ。勇と愛は寺院の石の階段のところまできて、登って行って鳥居をくぐり、両側に凄まじい顔をした仁王像がいる門を通過して、ろうそくに火がついてないとうろうが建ち並んだ石の通路を歩いていった。邪気を感じた勇と愛に鬼火炎の五体が襲ってくるので勇は愛を守り、斬妖刀で鬼火炎の五体を斬り裂いた。勇と愛は、笛を吹いて太鼓を叩いて踊る物の怪たちの声が外に響く寺院の中へ入り、先へ進んでいった。踊る物の怪たちの声が聞こえる大仏のある広間に入った。勇と愛に気づいた物の怪の音が止まって姿を消した。人間となった崇と薫と徹は再び姿を現して、「この大和に物の怪界をひろげ、物の怪たちを人に再生させて、新しい人類と文明を築くのだ！」と言った。三冠王は人間になっても妖術を使って、三力暴（さんりきぼう）で雷稲妻竜巻を放って、勇と愛は倒れ込んで気絶した。薫は、「大和の未来へ向けて！」と言って、呪文をとなえて、黒雲から微かな太陽を呼び起こした。徹は、「ノストラダムスの大予言にふさわしい時期に向けて！」と言って、三次元装置に2012年12月1日と設定した。崇は、「我々の新たな大和へいくぞ！」と言って、戻ってきた薫と徹と一緒に時空転送の門を通過しようとしたが進むことができなかった。渉は、「満月の夜にこんこん狐はしゃぎ出す！」と現れて、「俺が五重塔にある反射鏡の太陽の光を遮断してやった」と言って、棍棒槍を投げつけた。般若の面を被った徹は渉に向かって、角から稲妻を放って、棍棒槍を跳ね除けた。崇と薫と徹は渉に三力暴で雷稲妻竜巻を放って、「暗闇と静寂（せいじゃく）にふさわしい倒れ方だな！」と言って、渉は倒れて気絶した。五重塔の反射鏡に覆い被さった大蝦蟇蛙に崇と薫と徹は三力暴で雷稲妻竜巻を放って反射鏡から大蝦蟇蛙を取りはらった。そして、エネルギーが時空転送の門に注がれていった。崇と薫と徹は時空転送の門をくぐって通過していった。

大和の世紀末への旅

勇と愛は目覚めて立ち上がって倒れている渉のところに行って、「大丈夫か？」と聞いた。渉は目覚めて、「やつらはこの時空転送の門をくぐっていった！」と答えた。勇が持っている緑の翡翠と愛が持っている赤い珠玉は探知機のような役割を持ち、銅鏡に映し出して、場所を特定した勇の父の泰三がなぜかそこに現れた。薙刀（なぎなた）を背中に背負った坊主頭の泰三は驚いた勇と愛に、「伊賀の里での攻撃を受けて谷底に落ちるときに瞬間移動の術で他の場所へ移動していた」と言った。勇は泰三に、「撃たれたときの傷はどうした？」と聞いた。泰三は、「鉄板が入った鎧（よろい）を着ていたお陰で助かった！」と答えた。泰三は勇たちに、「こうしてはられないぞ！三冠王たちが仁徳天皇陵墓の封印をはずせば未来の大和に悪霊をもたらす！」と行った。黒雲が太陽の光を奪って反射鏡の光が閉ざされてきた。勇は、「これでは時空転送の門をくぐれない」と言って緑の翡翠に祈り、グリーンドラゴン（緑の龍）を晴天の光から呼び、太陽の光が入ると、反射鏡の光を時空転送の門に照らし出してエネルギーを注ぎ込んだ。さまよう悪霊たちは勇たちに襲いかかってきたが、悪霊たちをグリーンドラゴンが追っ払って、勇たちはすぐに時空転送の門をくぐって通過していった。未来にたどり着いた勇たちは金箔がはぐれ落ちた大仏を見ながら、扉を開いて寺院の外へ出ていった。泰三は愛に、「家康が武器を隠したとされる錦城の櫓に忍び込んで入手した！」と言って、悪霊祓いの般若波羅密多と刻まれた薙刀と卍剣（まんじけん）と鎖鎌（くさりがま）を見せ、卍剣と鎖鎌をもらおうと愛は、「えっ！こんなに」と言って、卍剣と鎖鎌を受け取り、渉に、「君にも戦いに協力してもらおうよ！」と言って、渉は、「俺・・・まあいいか」と言って鎖鎌を受け取った。薙刀を手にした泰三は、「三冠王たちはまだ近くにいるはずだ！」と言って大鷹を呼んで、勇と愛と泰三は大鷹に乗り、渉は大凧に乗って、仁徳天皇陵に向かっていった。三次元装置の設定時間が時計のように進んでいたために、未来に15分遅れてたどり着いていた勇たちは仁徳天皇陵に急いで勇と愛と泰三は大鷹から降り立ち渉は大凧から降り立った。陵墓の中で勇たちは三冠王たちが封印をはずす儀式をしていたところを止めに入った。徹は別世界を造ると、崇と薫を連れて一緒に移動する。勇たちも別世界へ移動していった。地獄のように飢餓状態でうろたえた人々がうごめく中で勇斗たちは目がうつろになったが、愛が赤い珠玉に祈り、火の鳥を呼び、三冠王たちに向かっていくと、徹が目から閃光弾を放ってきた。徹は不死鳥の火の鳥が放つ火炎砲に巻かれて火達磨となっていく。勇は斬妖刀で徹を般若の面ごと真っ向斬りで斬り裂いた。別世界は解かれて、仁徳天皇陵の古墳に崇と薫と勇たちは突き落とされた。気を失っていた勇たちが立ち上がろうとしたときに崇は雷を放って、同時に薫は竜巻を放って攻撃してきたが渉が暴露山水遁の術の大爆発で跳ね返して、崇と薫を吹き飛ばした。攻撃をかわした渉

は立ち上がろうとした。薫に、「陵墓の封印を解け！」と言って、鎖鎌の鎖で薫の首を絞めた。薫が涉に、「陵墓の封印は儀式をしたときに封印がはずれかけていたのだ！しばらくすると封印がはずれて悪霊たちがさまよい始めて、埋蔵金をどこかへ隠した」と言うと、涉は、鎖鎌の鎌で薫の首を引き裂いた。勇たちが近づいていくと、崇は変幻自在の術で消えてしまった。陵墓は石壇の蓋が開いて、悪霊たちがさまよい出て大阪難波の街までやってくると、闇化した次亜空間をもたらした。空から骸の悪霊たちが現れて、アスファルトからは鎧武者の屍（しかばね）たちが現れて、難波の街の人々に襲いかかり始めた。勇たちは難波の街に走って向かった。勇たちは難波の街にたどり着いて、高層ビルが建ち並ぶ近代都市を見て驚いた。勇は悪霊たちを火炎風車舞の術で火達磨にして、屍たちに火炎噴火山の術で地面から火炎弾を発して、斬妖刀で斬り裂いていく。愛は悪霊たちに花ノ舞木遁の術で花枝の毒棘を放って卍剣で突いて、泰三は屍たちに巨木突発の術で地面から巨木を引き出して薙刀で突いていく。涉は屍たちを暴露山水遁の術の大爆発で吹き飛ばして、鎖鎌を鎖を振り回して鎌で斬り裂いていった。悪霊たちと屍たちは一つにまとまった巨大化したがしゃがしゃどくろとなり、難波の街の小さいビルを手の平で振るって、足で蹴飛ばして、破壊して自動車にまたがって踏み潰して、逃げ惑う人々に火炎砲弾を放っていった。泰三はがしゃがしゃどくろの歩いてきたところに地雷土遁の術で地雷を地面に置いて爆破させて、勇は緑の翡翠に祈り、グリーンドラゴンを呼んだ。グリーンドラゴンはがしゃがしゃどくろに火炎痕を放つと、がしゃがしゃどくろは地面に叩きつけられた。勇は斬妖刀で頭蓋骨から脳天を突き刺した。がしゃがしゃどくろはいくつかの黒いカルマとなり、どこかへと散らばって、飛んでいった。闇に包まれた次亜空間を解き、晴天青空に戻り、黒頭巾に忍び装束の勇たちを人々はたたえた。徹と薫が倒れて、三分の二も烏天狗に戻った崇はビルの屋上で勇たちを見てあざわらいをした。

限りなく続く戦い

勇たちは滋賀の美咲公園で海の岬にたどり着いた。すると、どこからか九本の尻尾がある狐もどきの人獣（じんじゅう）が現れて、勇たちに幻術でマグマの塊（かたまり）を放ってきた。勇たちは咄嗟に、瞬間移動の術で他の場所に移動して、身を守った後で狐もどきの人獣は時空転送の門と三次元装置にマグマの塊を放って、溶かして破壊した。姿を消した後でもとの場所に戻って、「もう過去に戻ることはできないのか？」と嘆いた勇たちは戦いに執着した。洞窟に入り、それぞれどこかへ散らばって、洞窟を抜けていった。2013年4月7日の春頃、烏天狗に戻った烏田崇は変幻自在の術で人間の姿に化け、生計を立て、政治家となり、国会議員をめざして国会議員選挙候補として、悪霊から身を守る運動を演説して、市民を安心させて議員に当選した。就職難や失業やパワハラやセクハラや上からも下からも責められた下剋上の社会を改善していきたいと思う勇は相生勇斗（あいおいゆうと）と名を変えて、状況変換の術で大阪府立難波高校の教師に成り済ましていた。普段から度のない黒ぶちメガネをかけて、忍者であることを隠していた勇斗は大阪市立図書館で歴史など知識を学んだ。大阪と東京の大都市に散らばった黒いカルマの一つは大阪天王寺周辺の阿倍野に降り立っていた。夜になると、奇妙な怪奇事件が多発して、住宅街でひと気のない夜道を歩く者が犠牲となり、残虐な血まみれバラバラ遺体が発見された。難波高校で朝礼のときに帰宅途中はより道せず、まっすぐ自宅に帰るように説得していた勇斗は黒いカルマの一つが最近よく出没するという阿倍野にいき、夕方から夜にかけて、どんな滑稽な残物かを拝見しに黒頭巾に黒い装束を装い、住宅の屋根を飛び越えていった。勇斗はたまたま自分のクラスの生徒である栗田璃子（くりたりこ）が歩いてくるのを見て驚いていた。璃子の目の前に次亜空間が起きて、イタチの姿で前足と後ろ足に刃物のような鋭い爪を持った爪鎌鼬（つめかまいたち）が現れた。悲鳴をあげて転んで倒れた璃子のところに颯爽と現れた勇斗は、「なんだ！ 意外と可愛いやつだな！ だが善良なる市民を残忍なまでにした。きさまのなまった生皮をはぎ取ってやる」と言って、斬妖刀で攻撃して行くと、爪鎌鼬は、「うるさい！ だまれ！ 悪いのは人間のほうだ！ 俺たちはおまえたち人間が造り出した愚かな情けなのだ！」と言って、鋭い爪で勇斗の攻撃をかわしていった。勇斗は爪鎌鼬の鋭い爪をかわして、ぎりぎり避けて防いだが、背中をすり斬られた。背中から血が流れ始めた勇斗にものすごい勢いで風となって攻撃を始めてきた爪鎌鼬に、火炎烈火の術でものすごい勢いの火炎を放って、爪鎌鼬を火達磨にして、斬妖刀で脇腹を横斬りで斬り裂いた。粛清（しゅくせい）を誓った勇斗は自宅でニュースを見ていた。アナウンサーが、「姿を消した忍者の一人と思われる活躍により、痛ましい事件は収まって、阿倍野に住む市民は安心しました」と報じた後で徳島の小松島にある秋葉神社の天狗しばき祭には青竹で

作られた天狗しばき棒が祀（まつ）られていることを知り得た勇斗は、「崇が変幻自在の術でどこかへ行ってしまいうまに斬妖刀で斬り裂ければ」と思った。勇斗は休日に大阪から神戸を経て淡路島を通過して徳島の鳴門を過ぎて、小松島にある秋葉神社に祀られている天狗たたき棒を頂いたら大阪に戻ってきた。金剛山にて、勇斗は泰三の奥儀である巻物を受け取って神通力の雷鳴音遁の術と必殺技の火炎昇竜波を修行して伝授された。また黒いカルマの一つは東京の麻布に降り立っていた。東京メトロのトンネルで単細胞から多細胞となった顔は2本の角を持った牛で体は蜘蛛である牛鬼蜘蛛（ぎゅうきぐも）が現れて、トンネルの壁を這（は）いずり回って、次亜空間が起きて、駅ホームで人間を捕食していった。人々は逃げ惑っていたが、捕らえては人間の肉を喰いあさって骨まで舐めた。地下鉄が到着するのを見た牛鬼蜘蛛は扉が開いた時に乗客が出てきたところを狙って車両に入って乗客を襲い始めた。渋谷の大型液晶モニターでニュースを見ていた人々は事態に混乱してパニックになった。難波の自宅でニュースを見ていた勇斗は次亜空間の発生場所へ光速でたどり着ける超光速航の輪に入って、ワープして東京メトロの麻布十番駅で停まっている窓が血まみれとなった車両を見つけて、車両の上に乗った忍者勇斗は車両の窓を割って突入して、牛鬼蜘蛛に遭遇した。勇斗は、「おいっ！ その見苦しい化け物！」と言って、火炎火遁の術で攻撃しようとした牛鬼蜘蛛が口から放った糸に腕を巻かれて忍術をかけることができなくなった。勇斗は極投打の三要素を持った功で糸を解き放したが、車両を這いずり回っている牛鬼蜘蛛が勇斗に飛びついて床に倒された。牛鬼蜘蛛が迫った勇斗は腕力で牛鬼蜘蛛を少し持ち上げて、隙間ができたところを雷神音遁の術で轟音を響かせて超音波で跳ね除けた。起き上がる牛鬼蜘蛛は、「今度こそ格好の餌食にしてくれる」と言って、糸を放そうとしたところを勇斗は火炎風車舞の術を使って、ぐるぐる回る火炎を放って火達磨になっても、飛びかかってくる牛鬼蜘蛛に、「それにはお払い箱だ！」と言って、斬妖刀で頭から胴体まで真っ二つに真っ向で斬り斬り裂いた。四谷駅出口を出てきた勇斗は、「ここは江戸の処刑場で役人たちが、血しぶきを洗って、晒（さら）し首をした首洗い井戸が近いな」と言って、国会議事堂へ向かっていった。物の怪によって人間界で支配しようと企んだ烏田崇議員は議会から席をはずした。国会に忍びよった勇斗が廊下で崇とすれ違って、「きさまは見境のない道徳に背く行為をした」と言うと、崇は勇斗に、「おまえはなぜここまでやってきたのか？」と言った。崇は烏天狗となり、変幻自在の術でどこかへ消えていった。天狗たたき棒があることを忘れて、逃した勇斗は万能で予知能力のある大鷹を呼び、勇斗は大鷹に乗っていった。勇斗を乗せた大鷹は産業廃棄物処理場に降り立った。勇斗が処理場に入ろうとすると、出稼ぎで働いてるラテン系の背むし男のミラージュが進行をさまたげたが、勇斗は振り切って立ち入り禁止区域の焼却場に忍びよっていった。そこにいた神出鬼没（しんしゅつきぼつ）で現れる崇は、「どこまでもしぶといやつだな」と言った。勇斗は、「逃げないで男らしく勝負しろ」と言った。互いに攻撃を構えた。崇は、「いいぞ、妖術を使えるのは本能があるからだだが、剣術も得意でな」と言って、手に取り出した黒い太刀（たち）をぬいて、勇斗も背なかに背負った斬妖刀を抜いた。剣の斬り合いを繰り返して、長く競り合っているうちに勇斗は斬妖刀を崇の黒い太刀に弾き飛ばされてしまった勇斗は無防備となり、崇に火炎風車舞の術と火炎噴火山の術を放ったが崇は変幻自在の術で消えては現れて攻撃をかわす。勇斗は天狗たたき棒で頭を叩こうとした

が、天狗たたき棒を袈裟（けさ）斬りされて、先がとがった。崇は勇斗に最後の一击でプラズマを放ったが、勇斗が雷神音遁の術で轟音の超音波でプラズマを跳ね返すと、崇は地面に倒れ込んだ。勇斗は地面に落ちていた斬妖刀を取って、崇の腹に袈裟斬りで斬り裂かれた天狗たたき棒を突き刺して、身動きできなくなった崇を袈裟斬りして、火炎昇竜波を放った。崇を竜の形をした炎が突進して、崇を火達磨にして焼却炉へ突き落ととして、「人間になったのは失敗だったな！」と言って、焼却炉の扉を閉じて、焼却ボタンを押して、業火（ごうか）の炎に包まれた崇はもがいて倒れ込んで焼却された。精霊たちは三身一体（さんみいったい）となって再生されて蘇ることができた孝明天皇を連れていった。孝明天皇は勇斗に、「ここはどこだ！ なんだかみなれない建物があるな」と聞いた。勇斗は、「驚かないでくださいよ！ ここは2013年の未来なんです」と答えた。勇斗は、「三冠王という物の怪たちの企みがあって、陛下は身も魂をぬかれて未来にやってきたのです！」と答えた。孝明天皇は勇斗に、「過去には戻れるのか？」と聞いた。勇斗は、「時を越えることができる時空転送の門と三次元装置が破壊されましたが、必ず元の時代に戻る手段を見つけだします！」と答えた。大聖霊界にて、閻魔（えんま）大王様に、「よからぬことをした罰として制裁を受けるがよい」と決議を受けて地獄に追放された三冠王は三途の渡し舟に乗って、罪滅ぼしのために川を渡っていった。苛烈な戦いはひとまず終わりを告げた。

マドゥーの覚醒

2013年7月21日の夏頃、勇斗は難波高校の闘病生活で入院している教師と状況変換の術で入れ代わり、2年B組のクラスを受け持つ教師となった。終業式が終わった後は教室で夏休み前に控えている親睦会合宿について話をしていたよれよれの背広を着た黒ぶちメガネをかけた相生勇斗先生は、何を話しても、そんな時代遅れと生徒にバカにされた。大聖霊界にて、地獄をさまよいつづけている三冠王たちは、あの世の奈落の底から左が烏天狗で中央が雨河童で右が鬼夜叉の三冠王の三面がある阿修羅像を闇から出現させてからこの世の三冠王の僕（しもべ）である九尾狐（きゅうびぎつね）に拜ませてマドゥー教の信仰を促せと伝えた。そのために九尾狐は東京タワーが見える増上寺を乗っ取って、変幻自在の術で人間に化け、鞍馬亮（くらまりょう）として生きることにした。顔は三冠王の三面で腕は6本ある阿修羅像に対して、亮は三冠王たちが好んだマドゥーである蜂蜜をお供えしていた。袴姿の亮はマドゥー教をひろめるために都内を歩き回った。金髪で目が青く狐目で鼻が高くして色白のために、キリスト教の勧誘と間違われた亮は、「三冠王を世に生き返らせる六道輪廻で地獄道、畜生道、餓鬼道、修羅道、人間道、天道の内の修羅道へ導かれなければならない」とつぶやいた。閻魔大王様により、三冠王のような物の怪は輪廻からはずれた外道にしか道がなくされており、ただ地獄をさまようだけのありさまだった。マドゥー教の教祖となった亮は、三冠王を蘇らせるには性悪から性善として、生まれ変わらなければならないため、悪霊から身を守って下さって、病気も貧困にも打ち勝てる不思議な力があると、信仰してきた人々が、たまたま悪いことばかりが改善されて、尊崇（そんすう）されるようになった。勇斗は難波の自宅でロイヤルミルクティーを飲みながら見ていたニュースで数カ月前から失踪している烏田崇議員は、市民を物の怪から救った忍者に暗殺されたと聞いて疑われていることを感じていた。勇斗は親睦会合宿の準備をして眠りに就いた。翌朝、難波高校から吹田（すいた）の太陽の塔がある万博公園へバスで向かって無事にたどり着いた。天気で空気がすんだ自然文化園で昼は飯盒炊爨してバーベキューを食べた。その後、アルファベット文字を五つ見つけていくオリエンテーションがあって、生徒は順番ずつ歩いていった。夕方はカレーを作って食べて広場でキャンプファイヤーをした。夜は庭園でお化け大会があって、生徒は最初に一人ずつ歩いていき、男女ペアになって、歩いていけば白布をはおるお化けに扮した教師が脅かそうと、待ち構えていた。勇斗は脅かすために飛び出そうとしていた場所よりも前で女子が逃げてから、腰をぬかしているクラス生徒の佐藤洋一（さとうよういち）の前には踊ろしい物の怪が現れた。「誰か助けて！」と生徒の声が聞こえた勇斗は忍者になれず咄嗟に、「すぐに助けを呼んでくる！ 待ってろ！」と大声で言って、走っていくと、黒頭巾に黒い装束に装い、再び物の怪のところ

までやってきた勇斗は、「黒いカルマの一つがここに降り立っていたか？」と呟いた。次亜空間が起き始めた中で勇斗は物の怪が百目人（ひゃくめびと）であることが分かってから、百目人に、「なんのために人を脅かしている？」と聞いた。百目人は、「わしはこの森が気に入った、誰にもじゃまされたくないんだ」と答えた。百目人は勇斗に黄色い目玉を飛ばして攻撃してきた。勇斗は斬妖刀で黄色い目玉を一つ一つ斬り裂いていった。勇斗は黄色い目玉を残さず、すべて斬り裂いたので百目人は目が見えなくなって森へ逃げていった。勇斗はギックリ腰で倒れてる洋一を背負って、キャンプ場まで連れて行って、勇斗は姿を消した。百目人は顔に目と鼻と口ののないのっぺらぼうとなったために得意な変装術でハットを被って、黒いサングラスをかけて、襟付きのシャツにズボンにジャケットにレインコートを着て、革靴を履いた人間の姿となって、森から離れた街へ行った。朝の帰りのバスで洋一は、クラスメイトに、「昨日の夜、忍者に助けもらったんだぜ！ それにしても先生はやっぱり逃げ足が速いんだな」と言うと、勇斗は、「そんなことはない！ 勇敢にも誰か助けを求めに行ったんだから！ そんなことをいうやつは盆休みに川で泳いでると河童に足を取られるぞ！」と言って笑い合った。2013年9月1日の秋頃、始業式が終わった後で2年B組には生徒が元気に登校してきた。勇斗は、「おはようございます！ 元気でしたか？ 宿題はちゃんとやってきたか？」と聞いた。生徒は、「高校になってまで、宿題なんてやんないっすよ！」と言い笑い出した。勇斗は生徒に、「バカッ！ 宿題やってないやつは放課後に残って、補習だあぁ！」と怒鳴った。その夜、勇斗は難波の自宅でロイヤルミルクティーを飲みながら、「今日は生徒に言い過ぎたな！」とぼやいて、テレビをつけてニュースを見ていたら、驚いたことに自分とうり二つのニセモノが鶴橋の街を襲っていたので斬妖刀を取ると忍者の姿となり、15階にあるマンションの部屋の窓から羽衣の術で鶴橋まで飛んでいった。ビルに火災が起きており、黒い煙が上がる鶴橋駅付近に勇斗は降り立った。勇斗は鶴橋で街の人々に、「あいつ烏田崇議員を殺したやつだ！」と言われて鶴橋駅から缶を投げつけられた。勇斗は、「それは違うんだ！ 違うんです！」と言い返してニセモノを探しに行った。駅前商店街通りを出たら、道路に騒ぎがあって消防車とパトカー数台が来ていた。道路を挟んで勇斗の周りにいた警官は、「そこの忍者！ 止まれ！ 止まらないと撃つぞ！」と言って、発砲していった。危うくかわした勇斗は天王寺に向けて停まっている自動車の上を飛び越えて逃げると超高層ビルあべのハルクスに向かっていった。道路で次亜空間が起きて、勇斗は立ちほだかる自分とうり二つのニセモノと遭遇した。勇斗はニセモノに、「おまえはなんのために俺と偽って街を襲っている？」と聞いた。ニセモノは、「おまえに報復するためだ！ 精神的な苦痛を味わせてやる！」と答えた。ニセモノは火炎施風の術で炎の竜巻を起こしてもものすごい勢いで勇斗に向かってきた。自動車などが炎の竜巻に飲み込まれてやってきたときに勇斗は火炎容体の術で全身から炎で放出して、爪のある鎖を鉄柱に引っかけて、しがみついて、炎の竜巻から逃れた。勇斗はあべのハルクスに入ったニセモノを追っていき、エレベーターで58階に降りたのを見て、エレベーターで58階に向かった。58階で降りた勇斗が庭園の中に入ろうとしたときにニセモノが勇斗をニセモノの黒い鞘の斬妖刀で斬りかかってきたが、勇斗はそれを遮って真の斬妖刀を取り出して戦い始めた。剣の斬り合いが静まり、たしなめるニセモノは勇斗に火炎烈火の術でものすごい炎で攻撃した。勇斗は壁を駆け上がって行って、斬妖刀で斬り裂いた。ニセ

モノは立ち上がってサングラスをかけた人となったら、サングラスをはずしてのっぺらぼうとなって、その素顔を見せた。勇斗が、「ゲスの奇抜（きばつ）なオシャレだな！」と言うと、のっぺらぼうは、「覚えてないのか？ おまえに目をやられたものだ！」と言って目のない百目人となって硫酸の泡を吐き攻撃してきたが、勇斗は火炎の術で避けて火炎噴火山の術で百目人を囲んだ地面に火炎の噴火を放って斬り裂いた。百目人がすぐに倒れず膨張して爆発すると思った勇斗は、庭園から外に出て行って、羽衣の術で爆発と同時に窓ガラスが割れたものの間一髪で飛んで降りていった。ヘリの生中継でニュースを見ていた人々は英雄の忍者が二人いたことを知って、黒い鞆を持った忍者のほうが物の怪であったことで赤い鞆を持った忍者ほうも物の怪だと思い込まれて反響が悪くなった勇斗は自尊心と誇りを傷つけられた。

物の怪が終焉のとき

鬼夜叉と、尖った目をしたおかっぱ頭の黒髪で短い2本の角が生えた赤い肌の女夜叉（おんなやしゃ）の間で、産声を上げた鬼子は両親に似ていなくて歯が生えた異様な形で産まれてきたために鬼嫁の女夜叉が鬼子を喰い殺したことで、釈迦は女夜叉が鬼子のたたりを信じて、鬼子に呪われた人間の子をまた喰い殺さないように子供たちを隠した。嘆いた女夜叉は釈迦に外護神の鬼子母神となることを誓って安産の神様となり、人々に尊崇された。相生勇斗先生クラスの生徒に鬼子の呪いがついて歯が生えて生まれてきた倉木健三（くらきけんぞう）がいた。2013年11月20日の冬頃、勇斗は難波高校の修学旅行で一瀬スキー場に志賀高原まで高速バスでできていた。ただ人々に迫害を受けた心の傷が癒えないままである勇斗は、気を取り直して、宿舎では生徒と一緒に信州そばを食べた。そして、勇斗は自由行動でスキーを楽しむことになる生徒に、「くれぐれも上級側のほうにいかないように」と言って、注意しておいた。長野では2番目に高い山の志賀高原の初級はものたりないでいた勇斗はリフトに乗って、中級の横手山スキー場でスキーを楽しんでいた夕暮れのゲレンデの休憩場でスキーウェアを脱いで釜飯を食べていたときに他のクラス的女子生徒がやってきて、勇斗に、「大変！ 大変！ 先生！ 加藤浩一（かとうこういち）と戸田優梨菜（とだゆりな）と高田徹平（たかだてっぺい）の3人が上級リフトに乗っていった！」と伝えた。勇斗は、「わかった！ あいつら何を考えてるんだ！」と言って、釜飯を残さず食べた。集合時間までに戻ってこなかったらと心配して、浩一と優梨菜と徹平を探しにリフトに乗って上級の渋峠スキー場にやってきた勇斗は頂上付近の激しい吹雪の中で辺りを見渡しても、3人は見あたらなかった。勇斗はゲレンデを降りる途中で転倒してる徹平を見つけ出した勇斗は起こして目を覚ました徹平に、「大丈夫か？ 浩一と優梨菜はどこへ行った？」と聞いた。すると、撤兵は、「毛むくじゃらの大雪男（おおゆきおとこ）に連れ去られていった」と答えた。優斗は徹平を避難所に連れていった後で徹平に、「携帯で救助を頼む！」と言って、板とスティックが散らかっているところから大雪男と思わせる巨人の足跡をたどって、2人を探しにいった。優斗は夜になると視界が狭くなって、勇斗は険しい峠道を後には戻れなくなってしまった。浩一と優梨菜を担ぎ歩いている大雪男に白い和服を着た小雪娘（こゆきむすめ）は、「離してやりな！」と言った。大雪男は、「冗談じゃない。わいのごちそうだ」と答えた。2人を腕から離して、小雪娘を威嚇（いかく）していった。小雪娘は口から白い氷の粒の吐息を巻き散らして、大雪男は凍結していった。満月の光しか頼る物がなかったどこか狭い峠道を歩いていたとき、勇斗は足を滑らして崖から谷底に落ちてしまって、しばらくの間、横たわっていた。板とスティックとゴーグルは転落したときにどこかになくしてしまっていた。勇斗は立ち上がって、うろたえたが、斬妖刀の護り刀

があったのでひとまず安心した。勇斗は鶴橋の街で起きた事件が自分のせいと勘違いされ、もう戦いは退めて斬妖刀を刀掛けに置いてきた。谷底で狼狽える寒さと孤独を超えた孤立が原因で幻聴が聞こえて始め倒れ込んだ。そこに小雪娘が現れて、勇斗を抱き起こしてキスをした。本来なら凍死した女の霊の雪の精である雪女にキスをされると精気を奪われて殺されるというけれど、小雪娘にキスをされると、反対に精気が活発になって蘇るという。孤独の淵から蘇った冷血状態で冷たい肌の勇斗は小雪娘に、「ありがとう！なぜ君はこんなところにいるんだ？」と聞いた。小雪娘は、「あなたに私を暖めてほしいの！」と答えた。勇斗に抱きついた白い天使の小雪娘は勇斗に愛だから暖められて勇斗から離れていった。密かな恋心が生まれていた勇斗は奇想天外な奇跡で勇気もることができた。勇斗はお陰で蘇り浩一と優梨菜を探しに行き、谷底から峠道まで登って、歩いてきた辺りに満月の光の中で浩一と優梨菜がうつぶせになっているのを見つけた。勇斗は凍結した大雪男に忍術が使えるか試しに火炎火遁の術で炎を放って、大雪男を凍結から解かしてあぶって火達磨にした。勇斗は樹脂の多い松の木の枝を折って、ニット帽をはずして、その枝に巻きつけて、火達磨から火を灯してたいまつにした。優梨菜を目覚めさせて起こした勇斗に浩一が、「ごめん、先生！忠告を守らずに！」と言うと、勇斗は、「おまえたちが無事でいてくれて良かったよ！」と言った。勇斗は浩一と優梨菜と一緒にゲレンデの方向へ戻っていく途中で救助隊と出会って、「大丈夫ですか？ケガはありませんか？」と問われて宿舎に戻っていった。翌日、大雪男との嫌な体験をして不安と恐怖に脅えていた生徒を励ますために勇斗は良い思い出を残してあげたくて、スノボにも挑戦したりして楽しんで過ごした。帰りの高速バスで浩一は、「大雪男は本当にいたんだ！白い和服を着た女の子に助けられたんだ」と言って、浩一の仲間は、「うえ怖い！それは雪女じゃない。よく殺されなかったな」と言った。勇斗は小雪娘のことだと思って、勇気が湧いてテンションが上がり、生徒とたわむれて、難波高校まで帰っていった。邪教マドラーの三面が回転して、鬼夜叉の顔が真ん中にきた。鬼夜叉は強欲傲慢（ごうよくごうまん）な女夜叉が生まれたばかりの鬼子を喰い殺したことから女に恐怖心を抱いて、女嫌いになった。2013年12月24日クリスマスイブ、難波高校は冬休みに入り、自宅マンションで相変わらずストイックな生活をしていた勇斗は甘い香りにほのめかされて、愛だから抱きしめた綺麗な水色の髪に白い肌の小雪娘のことが恋しくて想い焦がれた。難波の街で花屋のバイトをしている愛は相生愛美（あいおいまなみ）と名を変えて、ふつうの女の子として生活をしていた。勇斗は愛美に父の泰三の居場所を聞き、歌舞伎座を訪れて、舞台女優の小松寧々（こまつねね）に、「父の泰三はいますか？」と聞いた。寧々は、「私の父と一緒に歌舞伎座で演技をやってます」と答えた。泰三は勇斗と会い、小松一之介（こまついちのすけ）と寧々の親子を紹介した後で勇斗を奥に連れて行って、「あのとき見たんだが、がしゃがしゃどくろが放った黒いカルマは全部で5体あったはずだ！」と言った。勇斗は、「じゃあ3体は倒したから、後は2体だな」と言った。泰三は、「もうひと息だ！今日の夜は小松宅でお呼ばれがある。勇斗もこないか？」と聞いた。勇斗は、「喜んでいくよ！」と答えた。その夜、小松家に訪れて泰三と勇斗は海鮮料理を食べて酒を飲んで酔いつぶれていた。泰三と勇斗のいる和室の間の照明の明かりがいきなり切れて暗くなった。厨房で調理している一之介と寧々は化け山猫（ばけやまねこ）となり、暗闇で光った猫目がうごめいている。微かに見た泰三と

勇斗は両手両足を縄で縛られて、身動きができなくなっていた。照明の明かりがつくと、出刃包丁を持った2匹の化け山猫は、「これからおまえらをばらばらに切り刻み、大釜で煮込んで食べてやる」と言った。突然、庭園が見えるテラス窓が凍結して、ガラス戸が割れ落ちた。庭園の外から小雪娘が現れるのが、満月の光ではっきりと見えた。小雪娘に勇斗は、「助けにきてくれたんだ」と聞いた。勇斗の忘れかけた恋心が復活した。極投打の三要素を持った功で縄を解き払って、泰三の縄を解いた勇斗は忍術で戦うことになった。小雪娘は勇斗に、「あの2人は山猫の化身の化け山猫よ!」と教えた。2匹の化け山猫は、「ばれたらには仕方ない。3人まとめて料理してやろう」と言うと、出刃包丁を振り回しては攻撃してきた。勇斗は化け山猫を火炎風車舞の術で火炎の風車を放って、泰三は地雷土遁の術で化け山猫がいる周辺に地雷爆破させて火達磨にした。猫爪を伸ばして、攻撃してきた山猫娘（やまねこむすめ）を小雪娘は白い氷の粒を巻き散らして凍結させた。5回も生き返れる山の精の化け山猫と山猫娘は蘇って、山のほうへ逃げていった。小雪娘はどこかに去っていた。幻覚を見ていたように小松家は心齋橋の和食亭に戻っていた。心齋橋通りを歩いている勇斗は泰三に、「寧々さんたちが山猫娘だったなんて残念だな!」と聞いた。泰三は、「一之介が化け山猫だったとは残念だった!」と答えた。勇斗は、「だけど大鋸屑（おがくず）とこぎたくない小悪魔を退治できたな!」と言った。泰三は、「そんなことよりも、小雪娘は知り合いなのか?」と聞いた。勇斗は、「志賀高原で遭難したときに助けてくれたんだ」と答えた。泰三は、「さては好きなのか?」と聞いた。勇斗は、「好きというか恋をしてる」と答えた。泰三は、「おまえ! 気は確かか! 相手は物の怪だ! いつ裏切られるかわからないぞ」と聞いた。勇斗は、「そんな子じゃないよ! 俺がなんとかして、人間にしてやる」と答えた。あきれた泰三は、「また小雪娘と会えばいいがな」と言うと、勇斗は、「そだな」と言って、グリコ看板のある戎橋の渡った道頓堀辺りで勇斗と別れていった。勇斗は戎橋筋の通りを歩きながら再びまた、小雪娘とどこかで会えるような気がしていた。深夜、勇斗がコンビニでアメリカンドッグを買って、自宅のマンション入口まできたときに、妖艶な小雪娘が待っていた。勇斗は小雪娘に、「どうしたの?」と聞いた。雪娘は、「忍者だったんだ、私の願いは人間となることなの! どうしたら人間になれる?」と尋ねた。勇斗は、「わかった! じゃあ! 俺の部屋にきなよ」と言って、マンションの部屋まで連れて行って、いきなりキスをしてベットへ横になり、愛だかで暖めて抱き合った。翌朝、目覚めると、いくどか愛だかで暖められた雪娘は恋が芽生えて、冷たかった肌が暖かい肌になって、黒髪の艶やかな人間となり、川村沙織（かわむらさおり）として生きていくことにした。勇斗も目覚めて、小雪娘が人間の姿に変わっていたことに驚いて、ますます恋しくなり、テレビをつけてニュースを見ていたら、アナウンサーは、「烏田議員失踪事件について、国会の廊下カメラが防犯が捉えた映像は英雄の忍者とすれ違うと、ゆがんだ顔に変貌して烏天狗となり、どこかへ消えていったことから、烏田議員は物の怪と判明しました。どこからかやってきた忍者はどこかに姿を消していますが、物の怪から市民を守ってくれたことを感謝したいと思います」と言った。誤解が解けた勇斗は忍者魂が蘇り、立ち上がった。その頃、マドゥーの陰謀がうごめいていた。鞍馬亮は学校から帰宅しようと道を歩いている倉木健三を催眠術で眠らせて、変幻自在の術で東京タワーの近くにある増上寺へ連れていった。最後の黒いカルマの二つは東京の深川地区の街角に落ちていた。次亜空間が

起きて、ひょっこり現れた塗壁（ぬりかべ）は手足を亀のように内側に隠して、四角い巨体を並行に分裂させて、高さ10メートルの平行四角形の壁で囲んで人々の通行を塞いだ。囲まれた壁で出口のない人々は壁を乗り越えようと試したが塗壁の顔が現れると口から大火炎を放って、火達磨にされてしまった。門前橋にある和束川（わずかがわ）の排水口に入ってくる汚水の下水道を通り、雷鳴獣（らいめいじゅう）は下水管のハシゴを勢いよく登って行って、マンホール周辺の路面ごと破壊した。雷鳴獣は塗壁に囲まれた深川地区の街に現れて、格好の餌となった人々を襲っていった。昼頃いきなり緊急ニュースがあって、「東京でまた物の怪による事件が起きました」と言うアナウンスを聞いた勇斗は超光速航の輪に入って、深川地区にワープしてきた。どこまで行っても壁だらけの塗壁を斬妖刀で斬り裂いたが、びくともしなかった。勇斗は塗壁に囲まれた深川地区の街の壁を乗り越え、血だらけの残骸が残るところから歩いて進んでくと、人魚と河童を合わせたような二本足で水かきのある3本爪と腹から尻尾にヒレがある雷鳴獣に出くわした。勇斗は壁に沿って人々を噛みついて、腕や足を引きもいで喰い殺していった雷鳴獣に、「おい！ そのの！ イカれたグロテスク！」と言った。猛獣のような雷鳴獣は勇斗に突進して着たが、勇斗は雷鳴獣を放り投げたところで放った網で取り押さえた。勇斗が雷鳴獣を捕らえた網を引っ張り出せば雷鳴獣は暴れ始めて、3本爪で網を破って、攻撃してきた。すぐに勇斗は雷鳴獣に火炎風車舞の術と火炎噴火山の術を放ったが雷鳴獣に攻撃をかわされた勇斗は背中を爪で裂かれ、背中を流血しながら、斬妖刀を振る舞えば雷鳴獣は逃げて、マンホール穴に入っていった。勇斗が雷鳴獣を追っていきこうとすると壁の近くで塗壁の顔が現れて、口から大火炎を放ってきた。勇斗が塗壁の大火炎を避けていくと埋蔵金を探して歩いてきた甲賀盗賊団の渉が現れて、「ここは俺に任しとけ！」と言った。勇斗は、「じゃあ！ よろしく！」と言って、マンホールの穴に入り、暗い汚水の下水道を通っていき、排水口を出て和束川をもぐっていった。鋭い牙の雷鳴獣を見つけ出して、勢いをつけて泳いで行って、雷鳴獣の尻尾をつかんだ。雷鳴獣は勇斗を振り払おうと、水中を勢いつけて、泳いで行って、水面に浮かび上がった勇斗は雷鳴獣の尻尾から腕を離して、斬妖刀で雷神獣の尻尾を斬り裂いて落とした。雷鳴獣は水面に落ちて沈んでいき、水面に立っていた勇斗は川底に沈んだ雷鳴獣が水面にすくい上げて斬妖刀で開いた口から脳天を突いて倒した。渉は塗壁が大火炎を放ったあとで鎖鎌で鎖の先端にかかった六角鉛を振るって、塗壁の頭にぶちあて、顔面を鎌で斬り裂いた。そこに悪霊が隠した埋蔵金が現れた。渉のところに勇斗が駆け付けると、埋蔵金が目についた。勇斗は、「これで黒いカルマの物の怪のすべてを退治した」と言う。渉は、「それにお目あての埋蔵金が手に入った！ いうことはない。あとはもどに戻るだけだな」と言った。勇斗が、「その埋蔵金をどうするつもりなんだ」と聞いた。渉は、「いつか甲賀の里にすべて持ち帰る」と答えた。勇斗は、「そんなことはさせない。その埋蔵金は莫大なお金になる。今の借金大国の大和に収めるんだ！」と言うと、渉は、「冗談じゃねえぞ！ 伊賀は刀を納めずに反乱を起こしたが、甲賀は刀を納めた代わりに大名に盗人を命じられたんだ！」と言って、決戦が始まった。勇斗は斬妖刀で渉は鎖鎌で斬り合い、忍術で戦う。競り合いの中で渉は斬神刀を鎖鎌の鎖で取られて、鎌で足を斬ろうとしたが、勇斗に腕を取られて、蹴り飛ばされた。勇斗は渉が落としてしまった鎖鎌の鎖から取られた斬妖刀を取って、渉に対して、最後のとどめとばかりに斬り裂こうとした。

すると、渉が降参してきたので手を止めた。勇斗と渉は忍者であることを隠して、埋蔵金を警察に引き渡した。警視庁から出てきた勇斗と渉のところに泰三と愛美がやってきた。愛美は増上寺で見た、「マドゥー教の教祖の鞍馬亮が倉木君をいぎなってどこかに連れていったのを見たの?」と言った。勇斗が、「健三は他のクラスの生徒だが、鞍馬亮は物の怪なんだ! 増上寺に何かありそうだ!」と言った。泰三は、「とりあえず行ってみよう」と言う。渉は、「俺も参加させてくれ!」と言って、どこか街のはずれたところから勇斗たちは忍者に装い、泰三は口よせで大鷹を呼び、勇斗と愛美と一緒に大鷹に乗り、渉は凧に乗って、増上寺へ向かっていった。増上寺にたどり着いた勇斗たちは曼荼羅(まんだら)の寺の中へ入り、様子を窺った。そこには健三をマドゥーの生贄(いけにえ)に捧げられる儀式をしようとしてる鞍馬亮がいた。亮はお経をととなえていたが、何か殺気を感じて手を休めると、狐目が笑い出して九尾狐となり、勇斗たちに毛針を放って攻撃してきた。それを避けた勇斗たちに九尾狐は狐もどきの人獣になり、マグマの塊を放ってきたが勇斗たちは瞬間移動の術で他の場所へ移動した。泰三は巨木突発(きよぼくとつぱつ)の術で地面から巨木を出現させて、狐もどきの人獣を吹き飛ばした。勇斗は巨木を駆け上がって、飛んで下りたときに狐もどき人獣を斬妖刀で脇腹を横斬りで斬り裂いた。すると、大仏の隣に置かれた青銅でできた阿修羅像が動き出して、三冠王の顔が横に回転して、真ん中にきた鬼夜叉の阿修羅像は勇斗たちに黄色い目から閃光弾を放った。鬼夜叉は邪教マドゥーとなり、「もうすぐ生き返れるの! 邪魔しないでもう鬼子の魂をいただいたの」と言った。勇斗たちは閃光弾を避けて、勇斗は、「きさまら、未来までやってきてまで、また地獄の底に落ちて痛い目にあいたいのか?」と言った。邪教マドゥーの三面が横に回転して、烏天狗の顔が真ん中にくると、阿修羅像は足音を立て、歩いてきながら、青銅でできた胴体がいくつも部品が二つに断片されて、擬人化した邪教マドゥーとなり、三面が三冠王で6本の腕の一心同体の化け物としてこの世に蘇り、活発な動きで勇斗たちを攻撃してきた。勇斗は、「地獄から生き返っても、また地獄をさまようだけだ!」と言って、背中に背負った斬妖刀を構える。泰三も背中に背負った薙刀を構えて、愛美も腰の帯に掛けた卍剣を構えて、渉も腰の帯に掛けた鎖鎌を構えて、戦い挑んだ。烏天狗は勇斗に、「おまえには焼却炉に落とされた恨みがある。今度は容赦しないぞ!」と言った。邪教マドゥーは6本の腕にプラズマを放つ霊剣を持って攻撃してきた。勇斗たちは剣を競り合い、火花を散らして電光石火の勇斗は力つき、鋼(はがね)の強靱(きょうじん)な邪教マドゥーの霊剣に斬妖刀を払われてしまった。渉が邪教マドゥーの利き手の腕に鎖鎌の鎖を投げて動かないように腕を取っている間に、泰三は邪教マドゥーの脇腹を薙刀を突き刺した。愛美は邪教マドゥーの両胸に2本の卍剣を突き刺した。渉と泰三と愛美は邪教マドゥーに払い飛ばされた。邪教マドゥーは勇斗たちに最後の一撃で打とうとした。そのとき、山にこもっていたものの、世を覆う異臭で眠りから覚めて遠い昔に亡くなったはずのつるっばげの長く伸びた白い髭(ひげ)で着物を着た貞明が現れて、邪教マドゥーに風塵金遁(ふうじんきんとん)の術を使って、鉄屑と塵(ちり)を見舞い吹き飛ばして勇斗たちへの攻撃をさまたげた。勇斗たちは寺の外へ出ると石の階段を下りていった。邪教マドゥーも寺から外へ出てくれば石の階段を下りてきた。石の通路で勇斗は火炎噴火山の術で、邪教マドゥーを囲んだ石の通路の地面から火炎の噴火を放った。泰三は地雷土遁の術で地雷を放って爆破させた。愛

美は花ノ舞木遁の術で花枝の毒棘を舞い突き刺してしびれさせた。渉が放った暴露山水遁の術の大爆発で倒れ込んだ邪教マドゥーを勇斗は斬妖刀で斬り裂いた。増上寺の大仏は邪教マドゥーに守護神の阿修羅像の身をかり立て、「これまでの悪巧みの報いを受けるがよい」と言った。邪教マドゥーを囲む石の通路が落ちていき、一緒に邪教マドゥーは火と硫黄の血の池地獄へ落ちていき、永遠に苦しみ続ける冷酷な仕打ちを受けた。石の通路はもとに戻った。勇斗たちは邪教マドゥーの野望をくつがえして、勇斗はマドゥーに、「きさまらは奈落の底がお似合いだ!」と言った。泰三はマドゥーに、「きっと生まれ変わっても虫かトカゲでしか生まれてこないぞ!」と言い、愛美は、「社会秩序をかく乱した邪教マドゥーを消滅させた!」と喜んだ。渉は、「もうこれで物の怪は現れないだろう!」と言った。勇斗は貞明に、「蛇女の牙穴から毒液をまかれて、目に入ってやられたんじゃないのか?」と聞いた。不老不死の貞明は、「わしが持っておった解毒薬のお陰で蛇女の毒が解けて、あれから金剛山にこもり、最近になって物の怪の臭いが漂ってきたので目覚めたときに天風神（てんふうじん）に連れてこられたのだ」と答えた。生贄にされそうになって鬼化した健三は鬼子の呪いが解けた。勇斗は学校の先生に戻って、しばらくの間、健三と一緒に東京見物をして無事に大阪へ連れ戻して正月を迎えた。大聖霊界にて、閻魔大王の決議を受けた邪教マドゥーが地獄からはい上がってきて、再び地獄に行く代わりに三冠王の邪教マドゥーを解き放された烏天狗は天神となって、雨河童は水神となって、鬼夜叉は鬼神となった。埋蔵金争いは警察が勇斗と渉に80パーセントを戻された後で、勇斗と渉はそれを半分に分けた。マドゥー教は崩壊したが、しかし、まだこの世の俗悪社会はやまないだろう!

阿修羅島にパピュラス星人が来襲

2014年2月3日節分の日、明治時代初期、内戦で軍隊が悪霊となり、迫りくる悪夢にうなされて目覚めた勇斗はあれに取りつかれたらまたたくもないと思って気がかりになってきた。その夜、自宅のマンションで勇斗が沙織とベランダで夜景を見ていたときに、謎の未確認飛行物体がマンションの屋上に降り立ってきて、背がひょろ長いパピュラス星人がレーザー光線銃を持って現れた。驚く勇斗はすぐに屋上に上がって、いつもは閉まっているはずのドアを開けて、パピュラス星人と遭遇した。パピュラス星人は攻撃をせず勇斗に、「昔、島に三冠王が現れて阿修羅島の村人を襲って、悪霊たちがうごめく島となった。我々は三冠王に永遠の命と引き換えに時空転送の門と三次元装置を手渡したが、三冠王はいなくなったために永遠の命を保てなくなって歳を取り始めた！そして、未来にやってきたのは君たちだった訳だ！今度は過去に戻ってみるがいい！我々は科学の神秘を地球人に見せつけるためじゃない！永遠の命となる秘薬と交換ができれば、再び時空転送の門と三次元装置を手渡そう？」と聞いてきた。勇斗は、「そういえば金剛山にこもった天仙人の貞明がくれた万年の薬を持っていた」と答えた。勇斗は過去に帰還するために止む終えずパピュラス星人に万年の薬を手渡した。パピュラス星人は新しい時空転送の門と三次元装置をマンションの屋上に設置したすえ、未確認飛行物体に乗って、どこかへ飛び立っていった。勇斗のところにやってきた管理人は、「今のはなんですか？」と言った。時空転送の門を見た管理人は、「ひー！」と悲鳴をあげて驚いた。勇斗は状況変換の術をかけた管理人に、「このことは忘れてください」と言った。涉が難波の街の金具屋で仕事している道具屋筋通りで生きる手段もなく、1年近くも浮浪者のように路上生活していた孝明天皇に過去へ戻れる情報を伝達した。放課後、勇斗は難波高校の2年B組クラスに教師として、「みんな！今年受験生になるんだから悔いのないようにがんばってくれ！」と最後の別れを言って、はぐらかした生徒たちにかけていた状況変換の術を解除した。生徒を見送った後で教室へ戻ったら、黒板には、「先生ありがとう」と書かれた忍者姿の勇斗自身が描かれていた。勇斗は、「あいつら俺の正体を知ってたのか？」とぼやいた。2014年2月22日帰還のときの太陽の登る昼頃、時空転送の門と三次元装置の覆っていた青いビニールカバーをはずして三次元装置を一八六八年二月二日明治元年に設定して孝明天皇と泰三と勇斗と沙織と愛美と涉は時空転送の門をくぐって通過して難波村の空き地に着いた。昔、福井の東尋坊（とうじんぼう）にて、仏道修行の妨げをした大和の大蛇（おろち）に似た第六天魔王と勇者の吾郎丸が戦って般若心経（はんにゃしんぎょう）のお経をとこなえた僧侶に負けた天魔の神霊が宿る東尋坊の丘に突き刺さった般若波羅蜜多と刻まれた斬妖刀を抜いた吾郎丸は口から火炎を放ってくる第六天魔王を袈裟斬りで斬り裂いて倒していった。それは徳川家康の手

に渡って妖（あやかし）の魔除けとして赤い鞆に徳川家康の家紋を記され置かれた。明治元年3月3日ひな祭り、戊辰戦争で勇と泰三は兵隊に取られて、明治政府の西郷隆盛が率いる新政府軍に属して、江戸幕府の徳川慶喜が率いる旧幕府軍と戦った。あとは鳥羽・伏見の戦い、甲州勝沼の戦い、宇都宮城の戦い、北越戦争、東北戦争、箱館戦争が終わると、明治2年京都御所にて、明治天皇を守る最後の戦いが始まった。大砲や火縄銃などが飛びかう中で争って、またも旧幕軍の慶喜将軍は悪魔界でエリートのルシファーシールドとなって兵隊たちは悪霊となって突撃してきた。夢は正夢だったんだと思った勇は兵隊を斬妖刀で斬り裂いて、泰三は兵隊を薙刀で突いて行って、涉は風丸翔（かざまるしょう）率いる甲賀盗賊団が加わって動きだした。勇は火炎噴火山の術で地面から火炎を噴火させた。泰三は地雷土遁の術で地面に地雷を爆破させた。涉は暴露山水遁の術で大爆発させた。隠れ里で甲賀盗賊団長の狐のお面に藍色の装束を装った翔は暗雲風遁の術で暗雲から達磨大使を呼び寄せて、地面に達磨落として兵隊たちは倒れ込んだ。悪事を働かせた罰として天使から悪魔にされたヤギのような角を持ったルシファーシールドはコウモリのような翼を広げて、空中に浮かんで勇斗たちに額のほくろから放射光弾を放って攻撃してきた。それを避けていった勇たちは忍術で攻撃した。勇は緑の翡翠に祈り、グリーンドラゴンを呼んで、ルシファーに火炎痕を放って攻撃していった。球体的シールドを張って、身を守ったルシファーはグリーンドラゴンに両手に溜（た）めて集めた手玉のプルトニウムを放つとグリーンドラゴンは落下して倒れ込んだ。翔は影法師（かげぼうし）の術で3体の影法師たちがルシファーに腕を取らせ、身動きができないルシファーに勇の火炎昇竜波で竜の形の炎が直撃させて火達磨にした。立ち上がり出すと、勇斗は側の翼を斬り裂いて飛べなくなったルシファーを聖なる斬妖刀で袈裟斬りで斬り裂いた。グリーンドラゴンは漲（みなぎ）る力で再び蘇って天空の空へ戻っていった。煙で辺りが見えにくい中で戦いが終わった。江戸幕府は幕府崩壊して完全解体となった。大政奉還にて、勇は明治天皇に斬妖刀を納めた。大阪の夏の陣のときに大坂城を裏から逃げて行方がわからなくなっていた慶喜は、二条城二の丸御殿で天皇に政権を返上して後に政治家として生きた。鬼とは悲しみと怒りの煩惱（ぼんのう）の現れである。

激しい雨

1950年、朝鮮戦争にて、北南は争いごとを起こして、南軍へ国連から米軍が派遣されて、クムガンサン（金剛山）に収容所を設けて、北軍の攻撃に備えた。米軍の兵士が誤って、地雷を踏み爆破したところから、北軍のゲリラに衝突した。手榴弾を投げて、機関銃を撃って、派手な激戦区の銃撃戦で戦火の火花が散った。米軍は圧勝によって、北軍の捕虜を収容所に送り込んだ。米軍カイル少佐は捕虜の中で青年のミンジュンに、「北軍部隊は何人いるんだ？ どこへ向かっている？」と尋ねた。ミンジュンは上半身を脱がされ、手と足をイスの上に縛られ、バケツの水にスポンジを水を浸して、電流を流したスポンジの電気ショックを背中にあてられ、拷問を受けたミンジュンは、「クソ野郎！」と言って、それに耐えて最後まで口を割らなかった。これ以上拷問は生命の危険を感じたカイル少佐は激戦地へミンジュンを囚（おとり）にして、連行させることにした。カイル少佐が率いる米軍部隊はクムガンサンを下って密林のジャングルでは葉っぱに一滴の雫が、したたり落ちて激しい雨が降り始めた。樹林に雷が落ちて、気がかりになった米軍部隊は立ち止まったが、それは雷音でなく北軍と南軍の戦いが始まった戦場の爆音だった。ミンジュンは隙を見て密林のジャングルを抜けていった。樹林に巻き付いた毒蛇にでくわして瞬発で蛇の首をつかんで投げ捨てた。ミンジュンは米軍が追ってくる気配を感じて、崖の下の濁流の川に飛び込んだまま身を流されてしまった。生死をさまよいながらも、奇跡的に意識を取り戻したミンジュンは丸太小屋で目覚めて、チュソヨンという若い娘に助けられた。体を起こしたミンジュンはソヨンに、「俺の名はヨンミンジュンといいます。助けてくれてありがとう！」と言った。ソヨンは、「あなたが岸辺に浮かんでいたところを兄が助けたんです！」と言った。戻ってきた兄のチュジフは、「クムガンサンの戦いが終わったか様子を見に行っていた」と言って、ミンジュンのところにやってきた。南軍領地であることに気づいたミンジュンはジフに、「かくまってくれなにか？」と願った。ジフはミンジュンが北軍兵であることを知っていても、ジフはそれを承知でかくまった。翌朝、ジフの丸太小屋にきたカイル少佐は、「ヨンミンジュンという北軍兵が訪ねてきてないか？」と尋ねた。ジフは、「そんな人は、知りません」と答えた。カイル少佐は、「嘘をつけ！ ミンジュンが岸辺に上げられているのを見た者がいるんだ！ ミンジュンはどこにいる？」と聞いた。ジフは海の藻屑（もずく）のようなまで血まみれに殴りつけられた。米軍兵は、「納屋の天井裏が怪しい」と言うと、容赦なく勝手に入り込み、天井裏に隠れていたミンジュンはカイル少佐に捕らわれて、暗い獄舎に送られた。朝鮮戦争は米軍兵を味方にした南軍が勝利して、停戦となり、そのとき、賽（さい）は投げられた。北軍は北朝鮮となり、南軍は韓国となって、パンムンジョンで休戦協定が開かれて調印した韓国の支配地域の領土問題でたびたび紛争が起きてい

た。朝鮮戦争は終戦を迎えてからミンジュンはソデムプリズンを釈放されてソヨンとジフの兄妹が住んだ丸太小屋を訪ねていった。ジフが、「妹はプサンコウ（釜山港）を出発して、アメリカはロサンゼルスのコリアンタウンにある母の家に移住した」と言うと、ミンジュンは、「あのときはすまなかった！」と言った。ソヨンは舞台女優としてウィルターン劇場で公演の芝居をやっていた。ミンジュンはアメリカへ向かう決意をして工場で働いて稼いだ金でアメリカへ渡ってソヨンと再会した。ミンジュンはソヨンの母の養子として反対を押し切って、大聖堂でソヨンと結婚した。

韓国女優殺人事件

60年後、ミンジュンとソヨンの間にできた娘のジヨンの娘、ソユンが生まれた。その頃、アメリカの企業は株が下がり、暴落社会が続き、コリアンタウンの貧困な暮らしで育ったソユンは大人になると、祖父のミンジュンは他界して、祖母のソヨンと同じ女優の道を目指して舞台上で活躍していた。魅惑に溢れた無邪気なソユンをヒロインの彼女役に、誠実で控えめなソジュンを彼氏役に、ジュウォンをライバル役とするアメリカが舞台の三角関係の韓国ラブロマンス映画の製作が始まった。韓国スターのソジュンと共演とあって、このチャンスを逃せなかった。映画の撮影が始まって、韓国女優の天真爛漫なユンソをソユンの妹役に、女豹な韓国人とイタリア人のハーフのヤンをジュウォンに片想い役に妖艶なニコルはソジュンに片想いをする役に決まっていた。撮影の途中で怪奇な事件が相次ぎ起きていった。9月頃、韓国女優を狙う猟奇事件が起きた。ヤンが自宅のバスルームの浴槽で水風呂に浸って喉を裂かれて横たわっていた。KEEP OUT（立ち入り禁止）の黄色いテープが貼られた事件現場にマーク・ガブリエル刑事とニック・コーディー刑事のコンビが登場した。ガブリエル刑事は吐き気を覚えながらも、生臭い血で染まった浴槽の水風呂に黒いフロックスが浮いているのを疑問に感じて手に取った。ドクター・トンプソンはヤンの遺体を検死したところによって何者かが他の場所で殺害して自宅に運んできたことがわかった。不幸な事件があったために撮影は中断された。ソユンはミンジュンに、「怖い」と言った。不安の過（よぎ）ると研ぎ澄まされたソユンをソジュンは、「怖くないよ」と言って、ほのめかされた誘惑に負けることなく包み込んだ。10月頃、また韓国女優を狙った猟奇事件が起きた。ニコルが自宅のベッドの上で白いシートを血で染めて喉を裂かれて横たわっていた。ラテン系で潔癖なガブリエル刑事は裸にされたおぞましい遺体にまた黒いフロックスが手に添えるように置かれていたことで同一犯と思った。黒人のコーディー刑事は首から血が流れてないことに気づいた。シートに付着した血を検査したドクター・トンプソンは、「これは、人の血ではない。鶏の血だよ」と言った。ガブリエル刑事はなんとか事件を解決したく、ソユンが韓国ドラマの友情出演のためにロスを離れると聞いてから咄嗟に危険を感じて、「ヘイ！ タクシー！」と呼んで、タクシーに乗って、国際空港へ向かって国際空港に着いたガブリエル刑事はソユンのいるところまで走っていった。警備員が観衆たちに添って、止めている中でガブリエル刑事は警備員を跳ね除けて、搭乗口まで歩いているソユンの背後にいる黒いサングラスをかけて、ハットをかぶった赤いコートを着た女がそのコートのポケットから取り出した銃でソユンを撃とうとしたときに、女の腕を取って銃口を天井に向けて持ってる銃を振り落とした。確保した赤いコートの女は黒髪でロングヘアーのカツラを被った男であった。ダニエル・タランティーノという同一性障害のある男は女性のと

きはティナ・イザベラといつわって、普段は花屋で働いて子供の頃から自分を女としてしか思えず女性に対して、嫉妬と妬みを抱いてイタリア語で意志の同意を合わせる意味を持つフロックスに根っこから黒い液体に染み込ませて、白い花びらを黒い花びらに加工した。そして、韓国女優に憧れがあって女になりきって強欲傲慢な卑劣な行為をした。11月頃、韓国女優を狙っていた猟奇事件は終わったはずだったが、再びまた起きた。自宅のバルコニーでユンソが手すりに手首をくくられて喉を裂かれて宙づりになっていた。ガブリエル刑事は裸にされた遺体の口にかましてある黒いフロックスを取り出してむごたらしいことをする真犯人がいると思って、事件が無事に解決してからも安心していただけは誤算であったと感じて、ットで4つ大罪を調べるうちに4人のメイド（巫女）に目を向けた。ガブリエル刑事が水のメイドは浴槽の水風呂に浸かっていたステファニーで華のメイドは、ベットのシートの上で黒いフロックスの花を手添えて横たわるニコルで風のメイドは夜風を感じるバルコニーで手首をくくられて、宙づりになっていたユンソだとしたら、次の犠牲となる雷のメイドはソジュンではないかと思った。それからダニエルはストーカー殺人未遂で逮捕されたが、不可思議な事件はダニエルのソーシャルネットワークの友達に、なぜかソジュンがいたことでマークすることにした。ソユンは韓国からロスに戻った翌日の夜、ソユンはオシャレなカフェで待ち合わせ、ソジュンと会って、撮影の打ち合わせをしていた。打ち合わせが終わると、カフェから出てきて、ソジュンはソユンを銀色のポルシェに乗せて移動した。ガブリエル刑事は車で後を追っていった。ソジュンはソユンの自宅マンションの入口に銀色のポルシェを着けた。ソジュンは銀色のポルシェからソユンを降ろしたら、そのまま去っていった。ソジュンは走行中に怪しい車が停まっているのに不吉な感じがして、ソユンの住むマンションに引き返してきた。ソジュンは一度だけいったことのあるソユンの号室を訪ねた。ソジュンはプッシュホンを鳴らしたけれど、出てこないでドアのノブを引いてドアを開いてみた。様子がおかしいと思ったソジュンは、「ソユン」と呼んで部屋の奥に入っていくと、何者かに後頭部を殴られて気絶した。ソユンのマンション近くで張り込んでいたマーク刑事はマンションの入口からソユンが何者かに手と足を持たれて、怪しい車に乗せられて、どこかへ連れ去られていったのを見た。マーク刑事は怪しい車の後を追っていった。怪しい車は製鉄所に着いた。ガブリエル刑事も製鉄所に車を着けた。ソユンを連れていった後を追ってマーク刑事は製鉄所の中に入っていった。斧（おの）を持ったフード付きのロングマントを着たカルト集団たちが、女狩りの儀式をしようとしていた。ガブリエル刑事はコーディネー刑事に至急応援を頼んでおいた。フードを被ったロングマントたちの一人がソユンを処刑台に載せると、ソユンの手足を縛って、処刑剣を持ってソユンの首を裂こうとした。そのとき、ソユンは、「待て！ なんで3人の女優を殺したの？」と聞いた。いったん手を止めたロングマントの男は被してあるフードをはぐったときにジュウォンの素顔を見した。ソユンは、「やっぱり！」と言ったら、ジュウォンは、「俺はうぬぼれたヤンはやってはいない。ふてぶてしいニコルとみずみずしいユンソは俺がやった、あの二人は兵役にいつているときに妹のジユと同じ韓国アーティストグループであった。ジユが事務所の社長に、『朝は早く、夜は遅い、ギャラは安い、学校を休んでまで活動したくない！ やめます』と訴えると、事務所の社長は、ジユに、『辞めるなら、グループ連帯で1億ウォン（700万円）を払えよ』と脅した。ジユはブラックな事務所の社長に

何も言えずグループに相談したところニコルとユンソは応じずに、『辞めるのはジユだろ!』と言って、酷いいじめがあったジユは一人で悩みをかかえて追い込まれて自殺したんだ!』と言って、ソユンは、「そんなことニコルとユンソには関係ないじゃない!」と言うと、ジュウォンは、「うるさい! あいつらがあのときにジユだけに責任を押し付けてなかったら!』と言った。ソユンは、「なぜ! 私まで殺すの?』と聞いた。ジュウォンは、「俺はたった一人だけの妹が亡くなったことを知らされた時から、その真相を知るために兵役逃れをして銃を持って脱走をはかって街で見つかって土砂降りの激しい雨の中で撃ちあってまずは事務所社長を殺すつもりだったが、懲役1年をくらって、出所後に渡米して俳優を志願したところでSNSでダニエルと知り合ってから、ニコルとユンソに復習しようと思った!』そして、君はジユが俺の妹であると知って、俺のことを調べていたからだ!』と答えた。ソユンは、「そんなにネガティブな方向に走っていったら、いいことにはならないよ!』と言った。そこにフードをはぐったダニエルの兄のジャック・タランティーノがやってきたら、普段は女性るときジョнна・イザベラで同性愛者のジャックは、「その女はおまえの正体を知った! 私かヤンを殺したときみたいにやるんだ!』と言った。ジュウォンは、「ソユンゆるせ!』と言い放った。しかし、ジュウォンが降り下ろした処刑剣は、ソユンではなくジャックの腹を刺して、背中を突き破ると、「あんたに会わなかったら、こんなことにならなかったんだ!』と言った。ジャックは、「裏切ったな!』と言いながら、倒れていった。ガブリエル刑事はジュウォンに、「凶器をおろせ!』と言って、ジュウォンに近づいていった。ジュウォンはガブリエル刑事の銃を蹴り飛ばして、処刑剣を振るって、マーク刑事は胸をすり斬られながらも、処刑剣を振り回してくる腕を取って、押さえ込んでジュウォンの股間に刃を持って行って斬り裂いて倒れていった。残るフードを被ったロングマンの男たちがマーク刑事を迫っていこうとしていたとき、応援に駆け付けて着たコーディー刑事と警官隊がフードを被ったロングマンの男たちに銃を向けて取り押さえてソユンを無事に保護した。意識を取り戻したソジュンがいうにはSNSで知り合いでもないのに友達リクエストを申請していたらしい。恐らくダニエルがジャックをかばうためだったのだろう。ジュウォンはダニエルに韓国女優たちの部屋を調べさせたのだろう。そして、女性に無視されて相手にされなくて恨みがある者や同性愛者で女に興味がなくて男を取られて、嫉妬してるゲイたちのカルト集団にジュウォンが加入したのは映画の話が決まってからだった。秩序を護るメイドの立場のはずが、罪を着せられた天使たちなどの悪魔カルト集団には邪魔でしかなかったのだろう! 祖母のソヨンと祖父のミンジュンとは違う形の悲劇愛で幕を閉じた。

アメリカからやってきた応龍の野暮

2013年の12月31日大晦日、カリフォルニア州ビバリーヒルズ街に住んでいる高校でジェイソン・ヤマダは他のクラスのジェフリーとの間でケイシー・キャメロンという女子を奪い合った。ケイシーはジェフリーのところに行ってしまうと、ジェイソンが悪いじめされるようになってジェフリーとその仲間3人に殴り殺された。霊安室に眠るジェイソンの遺体に応龍が乗り移って、ジェイソンは蘇った。ジェイソンはガソリンスタンドに置いてあったハーレーをかつぱらって、ジェフリーたちが乗るオープンカーを見つけ出して、バーガーレストランから出てきたジェフリーたちはオープンカーに乗って、走り出したのを見て、ハーレーを飛ばして、追っていった。ジェフリーたちのオープンカーが丘の登り坂を走っていたとき、ジェイソンはハーレーをかつ飛ばして、オープンカーの横に付けて、メットをはずしたジェイソンは、「おまえら俺を覚えてるか？ ジェイソン・ヤマダだ！ 地獄で待っているぜ！」と言って、丘のカーブで手榴弾をあけてオープンカーに投げ入れた。驚いたジェフリーたちは慌てたが、カーブでハンドルを切れずに丘から落ちて行って爆死した。ジェイソンはケイシーを殺さなかった。ジェフリーたちの事件を担当したガブリエル刑事はジェイソンの遺体はどこへ消えていったのかと思った。ガソリンスタンドでハーレーを盗まれた目撃者によると、腕にタトゥーがある男でジェイソンの写真を見せると、「そっくりだ」と証言した。ガブリエル刑事は非常な事件に頭を悩ませた。その後、ジェイソンはパスポートを偽造して、飛行機で日本に渡って、東京タワーが見える六本木ヒルズマンションに住む祖父の山田総重郎のところに居候した。アメリカで亡くなってるジェイソンを調べるために日本までやってきたガブリエル刑事は六本木ヒルズマンションの総重郎が住む号室を訪れた。ガブリエル刑事は、「カリフォルニア南署のマークと申します。ジェイソンのことは知ってますか？」と尋ねると、総重郎は、「いや！ 知らなんだ！」と言って、何か臭うものを感じて、中の様子を探してみると、ジェイソンが飛び出してガブリエル刑事を蹴飛ばして外へ出ていった。ガブリエル刑事は走っているジェイソンを追っていった。ガブリエル刑事はジェイソンに、「止まらないと撃つぞ！」と言って立ち止まらなかったのにジェイソンの足に発砲した。ジェイソンは、「俺はジェイソンじゃない」と言って、走っていった。ガブリエル刑事は、「足を撃っても倒れない。ゾンビみたいだ」と言った。たまたま六本木ヒルズに遊びにきていた勇斗は健三を待たして、六本木ヒルズマンションから鳴り響く銃声に異変を感じて向かった。ジェイソンは非常階段を上って行って、何者かがエレベーターを利用しないと思った勇斗は、非常階段を上っていったが、何者かの気配を感じなかったので3階からエレベーターで最上階へ向かった。夜空で向かいに森タワーが見える屋上で勇斗はジェンソンにでくわした。勇斗はジェイソンに、「なんで逃げてるんだ？」と

問いかけた。ジェイソンは勇斗に、「もう俺は死んでるんだ！ ほっといてくれ！ 追ってこないでくれ！ 追ってくるならば」と言うや、持っていた日本刀をぬいて攻撃してきた。勇斗は、「どういうことだ？」と聞いて、斬妖刀で攻撃をかわしながら、ジェイソンを袈裟斬りで斬り裂いたと思ったが、ジェイソンは立ち上がり、「俺には妖魔が乗り移ってる！」と答えて、Tシャツを脱ぎ捨てた。背中に応龍のタトゥーが見えた勇斗は背中と腕に妖気を感じた。勇斗は激しい斬り合いの中でジェイソンの背中を斬り裂いてジェイソンは倒れ込んだ。ジェイソンの背中からにじみ出てきた応龍が現れて森タワーの屋上に逃げていった。そのとき、ガブリエル刑事が屋上にやってきて、応龍を見ると、「モンスターか？」と言って、腰を下ろした。応龍は森タワー下にある広場の巨大蜘蛛像に開眼（かいがん）お魂（こん）入れの術で巨大蜘蛛像を生き物に蘇らせて、巨大蜘蛛（きょだいぐも）は口から丸めた糸を放って人々を襲い始めた。勇斗は瞬間移動の術で森タワーの屋上に移って、応龍に、「おい！ 腐った虫けら！ 今度は何を生き返らせるんだ？」と言って、火炎烈火の術で火炎を放ったが、勇斗は応龍の口から放された水に敗れた。応龍は勇斗に、「きさまごときに」と言って雲を呼んで嵐を起こして、勇斗の火遁の術をさまたげて忍術を使えない勇斗は斬妖刀をぬいて、応龍を攻撃した。応龍は鷹のような4本の爪で勇斗の斬妖刀を振り切って、巨大蜘蛛を呼び、森タワーのビルを這うように屋上まで上ってきた。巨大蜘蛛は勇斗に口から丸めた糸玉を放って、勇斗は糸玉に包まれて動きを止められた。勇斗は極投打の三要素を持った功で身をまとうように縛りついた糸玉を跳ね除けて、緑の翡翠に祈り、雨雲を解いて晴天の光からグリーンドラゴンを呼び、グリーンドラゴンは応龍に向かって火炎痕を放って攻撃した。グリーンドラゴンは襲いかかる巨大蜘蛛をさまたげながら、応龍に火炎痕を放った時に応龍の口から放された水に敗れて引き下がった。勇斗は応龍が口が開いているときを狙って斬妖刀を投げて口の中に突き刺した。応龍は倒れて巨大蜘蛛が生き物から像に戻ってバラバラに砕けた。人々は包まれた糸玉から解き放された。勇斗は応龍の陰謀を抑えた。大阪難波喫茶店にて、勇斗の父の泰三のお見合い話があり、お相手は写真で見るとはかなりの美女と聞いたので嬉しい思いでいっぱいのはずの泰三だったが、対面すると、年増のおばさんだった。だまされたと思った泰三は、「すいません！ この話しなかったことにしてください！」と言って、席をはずそうとしたが、お相手は、「なんで？ 私がおばさんだから！」と問われた。泰三は、「いいえ！ 正直、再婚でも若い女のほうがいいので」と答えた。お相手は怒り出して、口論となって、やがてお相手は化けの皮がはがれて、目と鼻のないお歯黒べたりとなって、泰三を襲いかかってきた。泰三は「うおっ！ あんたやっぱり化け物だったんか？」と言って逃げて立ち止まって、土遁地雷の術で地雷を手にとって、お歯黒べたりの口にかませ爆破させて頭を吹き飛ばしてお歯黒べたりは倒れていった。

奥付

奥付

Ninja soul

../../../../book/103181

著者： やっしー

著者プロフィール：../../../../users/nagisa825/profile

感想はこちらのコメントへ

../../../../book/103181

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103181>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<https://puboo.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

Ninja Soul

著 八島 聖彦

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
